


今 月 の 一 冊

元木更津市教育委員会教育長 西村 堯 選



私の心に残る小説 *My Favorite Novels* No3

ライオンのおやつ

小川 糸 著 ・ ポプラ文庫

ISBN 978-4591175064 720 円 + 税

ライオンの家に滞在する終末期の私たちは、ゲストと呼ばれている。そして、ゲストが亡くなると、二十四時間、エントランスのろうそくが灯される。ゲストの亡骸は、この正面のエントランスから出て、荼毘(だび)にふされるのだ。病院で亡くなった場合は、そうではない。亡骸は、人の目になるべく触れぬよう、ひっそりと裏口から搬出される。

(p.97)

「ライオンの家」は人生終末期のホスピスである。「海野 雫(しずく)」は、この「ライオンの家」に入所する。がんを患って、医師から余命幾ばくも無いことを告げられ、全てを整理して、ここに来ることにした。

まだ、30 歳代である。事態は、このように深刻なのに、私には、なぜか透明感漂う、淡々とした物語のように感じられた。

なぜだろうか。

一つは、この「ライオンの家」のある瀬戸内海の小島の情景描写の美しさ、静謐な空気のせいもあるだろう。そして、何よりも、「雫」の他の「ゲスト」(つまり終末期を迎えている人々)との淡々とした交流や観察が、大げさな表現を抑えて静かに語られる故であろう。

「雫」自身、余命を宣告されて荒れ狂う感情をぬいぐるみに八つ当たりし、引き裂いたり、投げつけたりする。しかし、やがて、

あんなことをされたのに、それでもぬいぐるみたちは私に笑いかけてくれた。その優しさに気づいた時、私の中で何かが吹っ切れた。こんな荒廃した心のまま、人生を終えてはいけないと思った。いや、悟ったのだ。

(p.105)

このような心境のもとで、「雫」は、「ライオンの家」にやって来た。

このホスピスを主宰するのは、「マドンナ」と呼ばれる女性である。

マドンナは、このホスピスを主宰する看護師で、緩和ケアを専門とする医師と連携しながら、適切な処置をほどこしてくれる。マドンナの存在は、ゲストたちの体と心の大きな支えだ。

(p.114)

痛みにはふたつあるのだと、マドンナは言う。ひとつは、体の痛み。もうひとつは、心の痛み。そして、体の痛みと心の痛み、両方を取り除かなければ幸せな最期は訪れないのだと。ホスピスは、体と心、両方の痛みを和らげるお手伝いをしてくれる場所だった。

(p.114)

ここでは、日曜日の午後 3 時、ゲストからのリクエストによって、おやつが用意される。ゲストは、そのリクエストにまつわる短い話を添える。なぜ、そのおやつをリクエストしたか、どんな思い出があるか、などを綴って出す。当日、「マドンナ」が、その「手紙」を読み上げる。

短い話(手紙)ではあるが、そのゲストの人生が凝縮され、万感の想いが込められている。

本の「帯」に、「人生の最後に食べたい” おやつ” は、なんですか。」とある。「ライオンのおやつ」という題名は、こういう意味だったのである。

86 歳の私は、「最後に食べたい” おやつ” はなんだろうか。」とひそかに自問している。